

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 56 号

平成18年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### 神谷美恵子著作集第1巻「生きがいについて」より（2）

#### 新しい生きがいの発見

こういう思いにうちのめされている人に必要なのは、単なる慰めや同情や説教ではない。もちろん金や物だけでも役に立たない。彼はただ、自分の存在はだれかのために、何かのために必要なのだ、ということ強く感じさせるものを求めてあえいでいるのである。

自分にはもう生きている意味も資格も無いのだ、と極度の劣等感につきおとされて自殺をはかろうとしていた青年が、小さな子供に救われたという話がある。子供が海におぼれそうになっているのを、彼がたまたま救ってやるまわりあわせとなり、自分でもまだ他人の役に立ちうるのだ、という発見の喜びに絶望から立ち直ったという。

生きがいをうしなったひとに対して新しい生存目標をもたらしてくれるものは、何にせよ、だれにせよ、天来の使者のようなものである。君は決して無用者ではないのだ。君にはどうしても生きてもらわなければ困る。君でなくてはできないことがあるのだ。ほら、君の手を、君の存在を待っているものがある。もしこういうよびかけがなんらかの「出会い」を通して、彼の心にまっすぐ響いてくるならば、彼はハッとめざめて、全身でその声をうけとめるであろう。

## 精 神 化

人間の精神の力ほど不思議なものはない。エミリー・ブロンテが「想像力に寄す」という詩で歌ったように、自分を取りまく環境にどのような不快なことがあっても、ひとは精神の翼にのって自由にあまがけることができる。またオルテガのいうように、群衆の中にも、いつでも好きなときに自己の内なる世界にひとりしりぞき、そこでしずかな深い世界に沈潜することができる。牢獄も、島への隔離も、病による苦痛さえも、精神をとじこめておくことはできない。精神の力によって人間は時空を超え、あらゆるところと時代のひとびとと手をつなぐことができる。ものの実際的効用からはなれて、知ること、考えること自体のたのしさにひたることもできる。色や形や音の美しさにふれるよろこびにみたされることもできる。大きな夢の殿堂を築き上げて、貧しく、みじめな現実の生活を、けんらんたるものにすることもできる。

結局、現世に生きるかぎり、生命と精神の矛盾のなかで行きぬくことこそ人間に与えられた運命なのであろう。パスカルのいう通り、ひとは天使でもなければ、動物でもないのであるから、どちらを否定しても人間の本性にもとることになる。問題になりうる唯一のことは、この二つのもののどちらに生存の重みをかけるか、ということである。

## 審美と創造の喜び

「私共のように長期療養者は……社会復帰も職業訓練も無駄で、将来はまったく絶望的である。と言っていたずらにこの尊い生命を粗末にしてはならない。たとえ前途に死の壁が閉ざされているとしても、この世に生まれでて来た以上、何か証拠を残しておきたい。それには絵を描くことだと思い、この14年間周囲のいかなる侮辱も嘲笑も受け流して、ただ一筋に絵を描き続けて来た。

私は思う、絵は楽しんで描くことである。常に自然の美を観察し絵筆を画面に思うままに塗りたくっていると、永い療養人生の旅路をふしぎに慰めてくれる。」

右は愛生園と同じ島にある、もう一つのらい園の一患者が書いた「わがよろこび」という文章の一節である。この人は永い精進の結果、大阪府の労働者の美術展に出品して入選し、「社会人と共通したレベルの作品として立証されたこと」のよろこびまで与えられている。

## 宗教的なよろこび

精神の世界のなかで宗教的なものの占める位置が大きいことは今さらいうまでもないことであろう。宗教というものを、既成宗教や宗派の枠にとらわれずに、教義や礼拝形式などの形をとる以前のものの、またはそれらを通して見られるもの、つまり、目に見えぬ人間の心のあり方にまで還元して考えるならば、それは認識、美、愛など、あらゆる領域に浸透しているように思われる。

自然科学者が、たった一つの小さな断定をなしうるために永年にわたる労苦をかさね、その結果えられたデータがたとえ自分の予測とちがっていたとしても、厳然たる事実の前には謙虚に、無私な心で頭を下げる時、その姿には宗教的な敬虔さに通じるものがある。また辛苦の結果、たとえ瞬間的、断片的にせよ、真理と思われるものを垣間みることがゆるされたとき、心に湧きあがるよろこびは法悦に近い。...

岸本(英夫東大教授)は宗教というものを「人間生活の究極的な意味を明らかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりを持つと人々によって信じられている、いとなみを中心とした文化現象である」としているが、この意味づけの役割こそ、終局的には宗教の持つ最も大きな働きであると思われる。あの「意味への欲求」という人間の心の根づよい渴望にこたえるものである。

## 現世へのもどりかた

こういう人は、いわばすでに永遠の時間に生きているようなわけで、ブレイクが歌ったように

「一粒の砂のうちにも一つの世界を見、  
一輪の野草のうちにも一つの天国を見、  
てのひらに無限につかみ  
一時間の中に永遠を持つ。」

したがって、こういう人は、柳宗悦がのべているように、現世のすべてを「究境界」のシンボルとして受け取り、日常のもっとも卑近ないとなみのうちにも、これを超える無限の意味を感じて、つきぬ興味を抱きつつ日を送る。こういう生き方をする人はふつう目だたないが、世のなかのあちこちで縁の下の力もちをつとめている。

いずれにしても、ひとたびこの世からはじき出され、虚無と絶望のなかで自己と対面したことがあるひとは、ふたたび生きがいを見いだしたとき、それがどこであろうとも、自己の存在がゆるさるうけ入れられていることに対する感謝の思いがあふれているにちがいない。もっともささやかな日常のよろこびも、あの虚無の闇を背景に、その光と色のかげやきを増すであろう。陽の光も、木の葉のさやぎもすべて自己の生を励ますものとして感ぜられるであろう。そしてたとえもし現世のなにごとにも、なんびとにも、自分が役に立ちえないとしても、いいあらし難いあの「瞬間」に、至高の力に支えられているのを感じたならば、その力のなかでただ生かされているというだけで、しみじみと生きがいをおぼえ、その大いなるものの前に自己の生命をさいごまで忠実に生きぬく責任を感じるであろう。たとえもし自分で自分の生の意味がわからなくても、その意味づけすらも大いなる他者の手にゆだねて、「野のすみれのように」ただ大地にすなおに咲いていることにやすらぎとよろこびをおぼえるであろう。

## のこされた問題

人間の存在意義は、その利用価値や有用性によるものではない。野に咲く花のように、ただ「無償に」存在しているひとも、大きな立場からみたら存在理由があるにちがいない。自分の眼に自分の存在の意味を感じられないひと、他人の目にもみとめられないようなひとでも、私たちと同じ生をうけた同胞なのである。もし彼らの存在意義が問題になるなら、まず自分の、そして人類全体の存在意義が問われなくてはならない。そもそも宇宙のなかで、人類の生存とはそれほど重大なものであろうか。人類を万物の中心と考え、生物のなかでの「霊長」と考えることからしてすでにこっけいな思いあがりではなからうか。

現に私たちも自分の存在意義の根拠を自分の内にはみいだしえず、「他者」のなかのみみいだしたものではなかったか。五体満足の私たちと病みおとろえた者との間に、どれだけのちがいがあるというのだろう。私たちもやがて間もなく病みおとろえて行くのではなかったか。パール・バックにとって、精薄の娘はそのままでかけがえのない子供であるように、大きな眼からみれば、病んでいる者、一人前でない者もまたかけがえのない存在であるにちがいない。少なくとも、そうでなければ、私たち自身の存在意義もだれが自信をもって断言できるであろうか。現在げんきで精神の世界に生きていると自負するひとも、もとをただせばやはり「単なる生命の一単位」にすぎなかったのであり、生命に育まれ、支えられて来たからこそ精神的な存在でもありえたのである。また現在もなお、生命の支えなくしては、一瞬たりとも精神的存在でありえないはずである。そのことは生きがい喪失の深淵にさまよったことのある人ならば、身にしみて知っているはずだ。

これらの病める人たちの問題は人間みんなの問題なのである。であるから私たちは、このひとたちひとりひとりとともに、たえずあらたに光を求めつづけるのみである。

らいの人に (1943・夏 著作集第2巻所収)

光うしないたるまなこうつろに  
肢(あし)うしないたるからだになわれて  
診察台(だい)の上にどさりとのせられた人よ  
私はあなたの前にこうべをたれる

あなたはだまっている  
かすかにほほえんでさえいる  
ああ しかし その沈黙は ほほえみは  
長い戦いの後にかちとられたものだ

運命とすれすれに生きているあなたよ  
のがれようとて放さぬその鉄の手に  
朝も昼も夜もつかまえられて  
十年、二十年、と生きてきたあなたよ

なぜ私たちでなくあなたが?  
あなたは代わって下さったのだ  
代わって人としてあらゆるものを奪われ  
地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ

ゆるして下さい らいの人よ  
浅く、かるく、生の海の面に浮かびただよい  
そこはかたなく 神だの靈魂だのと  
きこえよいことばをあやつる私たちを  
ことばもなくこうべたれれば  
あなたはただだまっている  
そしていたましくも歪められた面  
にかすかなほほえみさえ浮かべている

## 病床の詩

### 順めぐり

かつて くすし たりしものが  
今にして 病める者となる  
かつて 病める心を みとりし者が  
今にして 心を病みて  
くすし みとる者 身内から  
いたわれ ときにはあわれまれ  
笑われる者となる  
すべては 順めぐり  
すべては 順めぐり

### ひとの心がわかるとき

かんごふや おそうじの おばさんに  
説教や きついことばを 言われたとき  
その日は一日 暗くなる  
でも 一日たつと そのかんごふや おばさんの  
ことばのよってきたところがわかる  
その 生活と心境がわかる  
私もかつて くすし として  
きっと そんなことばを 患者さんに  
心なくも あびせたのに ちがいないことも。



## ごきげんうかがい

血管のごきげんのいい日と  
血管のごきげんななめの日とがある  
どうしてそうなのか  
きっとお天気のようなものだろう  
ごきげんの悪いときは  
じっと穴熊のように 寝床にひっこんでいよう  
ごきげんのいい日には  
窓から日に日に伸びるみどりを  
ながめて おどろきよろこび  
FMのバッハをきいて  
心の中で歌おう  
この世に生かされている  
よろこびを、ありがたさを。

## 同 志

こころとからだを病んで  
やっとあなたたちの列に加わった気がする  
島の人たちよ 精神病の人たちよ  
どうぞ 同志として 受け入れてください  
あなたと私のあいだに  
もう壁はないものとして

(1975・4・25 夜半)